

第 4 回アジア共同体講座「漢字の伝播とアジア共同体」

第 4 回では、中国文学部の林 文慶教授を招き、「漢字コミュニケーションとアジア共同体」のテーマで講座を開講しました。林先生の講座の概要は次のとおりです。

文字言語の発明は人類の歴史において、文明の急速な発展を促しました。しかも世界の文字の発展で、漢字は他の国と比較して最も特殊な象徴的なシステムであるといえるでしょう。独立した完全な形式は、例えば側面から見て書き写した「人」の形、高低起伏で書き表した「山」の様子、曲がりくねって流れる「水」の状態などの特定の意味を表します。さまざまな要素を加えることで、複雑な社会に適応する多くの漢字を造り出し、人と人のつながりたいという欲求を満たしてくれました。山に人を加えて「仙」人とし、人に水を加えて「（溺）」水とし、人と木を合わせて「休」息を作り、その他、人に共を加えて「供」給と為し、人と命を加えて「倫」理とするなど。

音読を通して発生した言葉は、いったん発音が変わると、記録される形も変わり、変化が大きい。それに対し漢字は安定性が高く、二千年以上前の古代の文献でさえも、今日の人々が読んで理解することができます。

日本、韓国、ベトナムなど中国を取り巻く周辺の国家は、中国語を表意と表音とを表す漢字の形を直接使用するなど、さまざまな時代に漢字を使用していました。但し、これは、単語の意味を示すためのみ使用され、読みの音には関係しません。逆に、単語の意味を示すためのみ使用され、読みの音には関係しない言葉もあります。

しかし、漢字を使用する過程で文字が混ざり合い、周囲の国々に伝わっていった漢字は、例えば「為」の字に見られるように、中国本土や台湾の文字と同じとは限りません。許慎の「説文解字」では「爲」で構成され、上部は「爪」の絵文字、そして南朝梁の顧野王《玉篇》に収録された「爲」には、字形は上記の篆書体のような文字であり、また宋代の「廣韻」では、この文字が俗に使われている「為」として収められ、大陸の簡体字ではさらにこの形は省略された文字「为」となりました。画数は4です。この字については、台湾の正字は「為」であり、大陸の標準字体は「为」であり、日本で使用される漢字は台湾と同じであり、韓国の漢字の字形は「説文解字」にある「爲」です。

日本と韓国は漢字の表意を借用した他に、同時に中国伝統の六書の造字原則を模倣、その中の六書の「会意」と「形声」による方法に従い、「凧」（たこ）、「臙」（すぐに）「悶つかえ」（塞ぐ、梗塞、妨げる）、「凧おろし」（高山から下に吹いていく風）、などの字を新たに作りました。韓国では、「尘」（「塵」の略字、大陸簡体字の「尘」）、「畚」（水田、稻田）、「垩」（土壌基礎）、蕎麦等、これらは中国特有のものではありません。

中国から広がったこの文化的な力は、東アジアに広がり、漢字の文化圏を形成しています。伝播の過程で、周囲の国が継承していることは分かりませんが、既存の字を踏襲するだけでなく、ひいては新たに独特の漢字や言語も作り出していて、さらには漢字の使用者の母語にも影響を与えています。台湾では、「庄」「伝」「応」「労」「井」などの日本の漢字の使用が少なからず見られ、「野球」「経済」「串」「場所」「宅急便」などの専門用語についても同様です。漢字の借用と同時に、文化の影響や思想の統合をもたらします。地理的な見地から見ると、文化的な観点から流れていくだけでなく、漢字文化圏の発展の共

通点を十分に理解することができます。

林文慶先生は、まず漢字の甲骨文と六書を紹介し、台湾、中国、韓国、日本、ベトナムなどで使用されている同じ漢字、さらに各国の需要に応じて新たに作り出した漢字の例を、日本、韓国の漢字や中国の簡体字を紹介し具体的に説明しました。林先生は次のように語りました。「周辺諸国は継承するだけでなく、新しい漢字を作り出し、独特の漢字や言葉を作り出し、中国語を母国語とする使用者に影響を与えている」例として日本は「凧」、「躰（やがて）」、「閤（つかえ）」（妨害）、「凧（おろし）」

（山から吹き降ろす風）などは、「国字」あるいは「和製漢字」と呼ばれます。この説明で、日本人は漢字が外来語だとは思っていない、これは自分の生活の一部として日本に深く根づいていることを示しています。これらの漢字は日本で使われているだけでなく、台湾や中国にも回ってきました。中国で最も有名な「現代漢語辞典」には、「和製漢字」がたくさん収録されています。また、「和製漢字」に加えて、「和製漢語」もあります。私たちが今日使用している「民主」、「科学」、「文化」、「経済」、「政治」などの社会科学と人文科学の言語は、ほとんどすべて「和製漢語」です。同様に、日本人がそれらの言葉を外来語とは思っていないように、私たちもまたこれらの用語が外来語ではないと思っています。近年、台湾の若者たちは、「素人」、「達人」、「色違い」などの言葉を多用していて、完全に受け入れていると言っても過言ではありません。なぜ台湾人、特に台湾の若者たちは、「和製漢語」の受け入れが高いのでしょうか？日本文化が好まれていることのほか、日本漢字と台湾の漢字の類似性が高く、加えて漢字は表意文字であるため、意味が漢字の形態から理解できるという点もあります。さらには、一般的に使用されていない漢字の

組み合わせ（色違いなど）を使用すると、話題性と新鮮感が生じ、新しい刺激がもたらされます。この種の刺激は若者に人気があり、これらの要素はみな若者が求めているものです。

第 1 週の鄭俊坤博士の講義で提示されたことを覚えているでしょうか。「アジア共同体を構築するにあたっては、「国民」及び「内心の思想」の壁のほか、「言語」の壁がまず最初に克服されなければならない」と。アジア、特に東アジアは漢字文化圏に属しています。東アジア諸国は独自の語音と文法体系を持っていて、それらは互いにつながっていませんが、共通の漢字である程度のコミュニケーションが可能です。1980 年代以降、韓国は徐々に漢字の使用を減らしたが、何十年も経ってから韓国人と韓国政府は漢字の重要性を再評価し始めました。文献によると、韓国政府は 2011 年から漢字学習を小学校の正式な教育カリキュラムに再び取り入れ、2018 年に小学 3 年生の教科書に漢字を併記する計画を立てています。ベトナムは近年経済発展の必要性から（統計によると、漢字文化圏はベトナムへの外国人投資の 40% を占める）漢字の再度重視し始めています。これらのことから、私たちがアジア諸国、特に東アジアの言語障壁を克服するためには、普遍的な漢字システムを構築することが絶対に不可欠であると考えています。

（文責：陳順益）